

氏名	ナガ オカ サト キ 長 岡 聡 季
学位の種類	博士 (音楽)
学位記番号	博音第173号
学位授与年月日	平成22年3月25日
学位論文等題目	〈作品〉シューベルト作曲 ヴァイオリンソナタ ニ長調D384 他 〈論文〉シューベルトのヴァイオリン作品－《ロンド》と《幻想曲》に いたる道筋を中心として－

論文等審査委員

(総合主査)	東京芸術大学	教授 (音楽学部)	岡山 潔
(副査)	〃	准教授 (〃)	松原 勝也
(〃)	〃	教授 (〃)	植田 克己
(〃)	〃	〃 (〃)	大角 欣矢

(論文内容の要旨)

フランツ・ペーター・シューベルト Franz Peter Schubert (1797-1828) はその晩年、ヴァイオリンとピアノのために《ロンド》D 895と《幻想曲》D 934の2曲の二重奏作品を書いた。いずれもかなりの技巧を要する大曲だが、同時期に書かれた数多の傑作群に比べて、非常に曖昧な評価しか与えられてこなかった。こうした状況は、何よりも作品が正しく理解されてこなかったことに起因すると考えられる。本論の目的は、この2曲に対する理解を深め、さらにその真価を明らかにすることにある。

そのため、本論では、シューベルトが残したヴァイオリンとピアノのための二重奏作品全6曲を考察対象とし、比較的早い時期に書かれた4曲のヴァイオリン・ソナタと、《ロンド》及び《幻想曲》の「位置づけ」を明確にする。ここで「位置づけ」という言葉を用いたのは、これらの作品に関して、独立して様々な考察がなされてきたものの、初期の4曲のヴァイオリン・ソナタと後期の2曲を関連づけて論じることがなされてこなかったからである。ソナタ4曲と後期の2曲の間に10年の空白期間があったこと、また初期作品と後期作品には形式的に乖離があることから、両者を明確につなぐ線は意識されてこなかった。そこで本論では、伝記的な考察および、これまではヴァイオリン作品において論じられることのなかった空白期間とされる10年間のシューベルトの活動の考察により、初期のヴァイオリン・ソナタからどのようにして後期の二重奏曲のような形式の作品が生まれたのか、その必然性を明らかにする。それにより作品へのアプローチの可能性を広げる。さらに、特に《幻想曲》に関しては、構造的に難解であるゆえに演奏が困難とされただけでなく、演奏技法そのものにも非常に難しい点があるため、現存する自筆譜と初版譜との間にかなりの差異がみられ、作品理解をさらに困難なものにしている。本論ではこうした状況を踏まえ、作品の真価を伝えるような演奏を実践するための提言も行う。

第1章では、シューベルトが突如ヴァイオリン作品を手がけた理由を、伝記的事実と照合して考察した。その結果、初期の4曲のヴァイオリン・ソナタは、作曲をはじめた当初から多く書かれてきた、シューベルトの家庭内での演奏用の弦楽四重奏曲の延長上に存在する作品、いわばアマチュアの音楽愛好家として作られたものである事がわかった。一方、それらの楽曲構造には、提示部に多くの調を持つソナタ形式や、エピソードを1つしかもたないロンド形式などが散見され、シューベルトが初期の段階においても、後期作品に繋がる独自の形式構造を模索していたことが明らかになった。

第2章では、空白期間である10年間のうち、その最初の7年間は、器楽曲の空白時期と重なっている事に注目し、この時期のシューベルトの活動を当時の音楽界の状況に照らしながら考察した。この時期

には自身が一流の演奏家とはなれなかったシューベルトが一流の職業作曲家として認められるために、オペラを作曲して上演することやソナタを出版することを目標に様々な活動をしていたことが明らかにされた。生活していくためにも、依頼された作曲に当然専念する事となり、初期のように自らが書きたい作品に時間を費やすことが不可能であったとの結論に至った。空白期間の後半3年間では、器楽曲の作曲依頼も来るようになり、前の7年間の活動を生かした作曲法を確立した。そこで注目されるのは自作歌曲の旋律を、器楽曲に引用する方法であった。歌曲の文学的内容を音楽そのものに活かすという、シューベルトの培ってきた作曲技法により、原曲の歌曲からの引用が、作品全体の構成に拘わる程の強い影響を与えていることが明らかにされた。

続く第3章では後期に二重奏曲を手掛けた理由、およびこの2曲についての考察を行った。空白期間の考察を経る事によって、ヴァイオリンとピアノのための二重奏曲がここまで作られなかった理由としては依頼が無かったためではないかと推測できる。さらに、ロンドや幻想曲といった形式が選ばれたのは、この時期にあった作曲依頼が、当時好まれていた、単一楽章の技巧的な作品を求めるものであったという仮定に至った。このような依頼であってもシューベルトは技巧の誇示を目的とした作品を避け、形式的に創意工夫を凝らした。また特に《幻想曲》の難解な構造を理解するため、幻想曲というジャンルそのもの歴史を振り返った。これにより、この作品が幻想曲というジャンル史において、また技巧的な二重奏曲というジャンルにおいても先駆を成すものであることが明らかになった。この作品においても引用された歌曲の文学的内容が作品を解釈する上で重要な手掛かりとなる。さらに《幻想曲》では、これらの考察を生かした上で、楽譜資料の状況に応じた実際の演奏に対する具体案を提示した。

本論で明らかとなったヴァイオリンとピアノのための作品の「位置づけ」を踏まえ、さらに演奏において、これらの作品の真価を明示していくことを目指す。

(総合審査結果の趣旨)

本研究はフランツ・ピーター・シューベルト(1797~1828)が晩年に書いたヴァイオリンとピアノのための2曲の二重奏曲、「ロンド」と「幻想曲」についての考察、及びその演奏発表である。

室内楽を専攻する学生にとって、この2作品は、研究意欲を駆り立てられる、大変魅力のある、しかしまた、非常に手ごわい難曲でもある。

論文では、まず、シューベルトが31年の短い人生の中で行った多彩な作曲活動の全体を把握し、そこからこの晩年の2作品の位置づけとその独自性の解明が行われ、次に、多くの資料や先行研究に基づいた作品分析、そこに自らの作品分析も加えた研究が展開されており、大変説得力のある充実した内容となっている。

特に「幻想曲」についてはその難解な構造を解き明かすため、幻想曲というジャンルの歴史を探り、また、歌曲の引用の手法などを研究し、いかにシューベルトが革新的な試みをこの作品において行ったかを追究した件は、非常に興味深い。唯一点、実技系の博士論文として、作品の演奏法に関する研究の記述に、より多くの比重が置かれると、一層意義深いものになったであろう。

申請者はこれまで博士リサイタル等において、シューベルトのヴァイオリン作品を殆どすべて演奏しており、論文のみならず、演奏面でも作品相互の比較研究を行なっている。今回の学位論文審査会における演奏曲目は初期のソナタ第1番と本題の2つの二重奏作品であったが、それぞれの作品の独自性ははっきりと聴き取れる内容の充実したもので、特に申請者の繊細な感性による格調高い演奏が印象的であった。

また、室内楽専攻の申請者は、在学中に身に付けたアンサンブル感覚をフルに発揮し、ピアノとのバランスも理想的で、非常に緻密なアンサンブルを展開した。さらに望まれることとしては、ロマン派特有の感情表現がもっと思い切って演奏に反映されると、作品の魅力が一層引き出せたように思った。

しかしながら本研究は学術的研究を演奏に見事に生かした、実技系の博士論文の一つの模範となるものといえよう。

以上のことから本研究を学位授与に十分値するものとして合格とする。